

外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる外国語活動の工夫 — 中学生との関わりの場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して —

庄原市立高野小学校 伊達 詩恵

研究の要約

本研究は、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるために、中学生との関わりの場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫について考察したものである。文献研究から、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるためには、変化を付けた「聞く」「話す」活動の工夫と中学生との関わりの場を取り入れることが有効であると分かった。そこで、アルファベットを扱う単元においても、これらの工夫を取り入れることで外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができると考え、「聞く」「話す」活動の工夫と中学生との関わりの場を取り入れた取組を行った。その結果、アルファベットを扱う単元で「聞く」「話す」活動の工夫と中学生との関わりの場を取り入れることは、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることや、中学生を学習の手本としながら文字に対する興味・関心を高めることに有効であることが分かった。

キーワード：中学生との関わりの場 アルファベット 「聞く」「話す」活動

I 主題設定の理由

「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(平成26年)では、小学校の「高学年では身近なことについて基本的な表現によって『聞く』『話す』に加え、積極的に『読む』『書く』の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。」¹⁾ことが次期学習指導要領の教育目標・内容の改善として示されている。小学校学習指導要領解説外国語活動編(平成20年、以下「解説」とする。)では、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うことや、アルファベットなどの文字の扱いについては、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いることが示されている。高橋美由紀(2007)は、小学生と中学生の英語活動における交流活動を通して、小学生も中学生も学習への興味や関心が一層深まり、学習の動機付けに繋がったと述べている。

所属校第5学年の児童は、児童アンケートで英語を聞いたり話したりすることに対して86%の児童が肯定的に回答している。しかし、実際のコミュニケーション活動では、伝えたいことをうまく伝えられていない場面が見られ、コミュニケーションに必要な語彙や表現に十分慣れ親しませていなかったことが

原因として考えられる。また、文字について「読んでみたい」「書いてみたい」と全員が肯定的に回答している。この興味・関心をもっと学習したいという意欲や態度に繋げていく必要があると考える。

そこで本研究では、単元の工夫として、メッセージカード作りという文字を扱う活動を設定し、既に英語の読み書きを学んでいる中学生との関わりの場を取り入れ、児童に中学生とアルファベットを題材にしたコミュニケーション活動を行わせる。これらの工夫を通して、児童は、文字への興味をもちながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるかと考える。

アルファベットを扱う単元で、文字への興味・関心を高めながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるための工夫として、中学生との関わりの場を取り入れることに独自性があると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむとは

「解説」には、外国語活動では、外国語のもつ音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切である

と示されている。実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、英語特有のリズムやイントネーションを体得し児童が日本語と英語との音声面などの違いに気付いたり、単語を聞いたり発音したりして日本語にない音に触れ、慣れ親しんだりすると示されている。兼重昇ら（2008）は、「慣れ親しむとは、『定着』を図ることではなく、外国語を聞いて、抵抗感を感じずに聞き入ったり、一部の単語が分かって喜びを感じたりすることである。また、発話とは、知っている語彙を使って自分を表現しようとしたり、普段聞き慣れた表現が思わず口から出たりすることである。」²⁾と述べている。西尾由里（2015）は、「慣れ親しむ」ということは、何度も同じような単語や表現がインプットされ、完全ではないが、それをある程度記憶し、使うことができるということだと述べている。

以上のことから、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむとは、英語のリズムやイントネーション、日本語と英語との音声面の違いを認識しながら聞いたり話したりし、外国語の音声やコミュニケーションに必要な表現に対して、抵抗を感じずに理解しようとして聞いたり、ある程度記憶して知っている外国語の語彙や表現を使って自分の思いや考えを表現したりしようとすることであると考えられる。

2 中学生との関わりの場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるためには

(1) アルファベットを扱う単元について

「解説」では、アルファベットなどの文字について、アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる程度にとどめるなど児童に対して過度の負担を強いることなく指導する必要があると示されている。直山木綿子（2013）は、文字の扱いについて、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用い、聞くこと及び話すこととの関連をもたせた指導を行う必要があると述べている。

アレン玉井光江（2014）は、アルファベット学習では、文字の形とその呼び方（名前）を学びながら、その呼び方の中にある文字の音を知り、その音にしっかり慣れ、発音できるようになることが大切であると述べている。本田勝久ら（2007）は、英語活動で文字に触れる活動を行う場合は、ローマ字は英語ではないことをしっかりと児童に認識させなければならないと述べている。

「教育課程企画特別部会 論点整理」（平成27年）では、高学年から発達段階に応じて4技能を総合的・系統的に扱う教科学習を行うことが求められ、新たにアルファベットの文字や単語などの認識、国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きなどを促す指導を行うために必要な時間を確保することが必要であると示されている。

中村典生（2008）は、外国語活動の目標として「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことが謳われており、文字に慣れ親しむことも文字を使ったコミュニケーションの大切さを知ることにつながるという意味で、重要な素地に当たると述べている。つまり、文字を使ったコミュニケーションの大切さを知るためには、文字に慣れ親しませることが必要であると考えられる。

以上のことから、本研究ではALTへのメッセージカード作りという活動を設定し、そのカード作りに向けて、アルファベットを題材にした活動を行っていく。その中で、アルファベットの名前に含まれている英語の音や日本語と英語の音声面の違いに気付かせたり、ローマ字読みと英語読みを比較させてローマ字読みと英語読みは違うことを児童に意識させたりし、児童に過度の負担をかけることなく単語を含む文字に興味をもたせながらアルファベットに慣れ親しませていく。

(2) アルファベットを扱う単元の工夫を通して外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるためには

酒井英樹（2014）は、英語に慣れ親しませるためには、英語を聞いたり話したりする機会を多く作ることや、「聞く」ことを中心としながら段階的に発話の機会を与えていくことが大切だと述べている。大城賢ら（2008）は、「聞く」「話す」活動を行う際の留意点として、表1に示すことを挙げている。

表1 「聞く」「話す」活動を行う際の留意点⁽¹⁾

「聞く」ことを中心とした活動	「話す」ことを中心とした活動
①目的をもって聞かせる。	①「話す」必然性のある活動を設定する。
②意味のある内容を繰り返し聞かせる。	②段階を追って「話す」活動を設定する。
③聞いた語彙や表現等を使う活動へつなげる。	③定型表現を利用する。

また、大城ら（2008）は、外国語活動の中では、「聞く」活動と「話す」活動とを取り入れ、単に「聞

く」「話す」活動に終わらず、「聞く・話す」を組み合わせて「コミュニケーション」活動を行う必要があると述べている。金森強（2011）は、言語材料は同じでも、活動内容が異なる聞く活動があれば楽しく練習でき、何度も同じ表現に出くわす回数が増えることで、徐々に子供の理解を深め、表現に慣れさせることができると述べている。また、コミュニケーション活動での思いを伝える場づくりのポイントとして、聞く必然性、伝えるための動機付け、英語を使う必然性、伝えたい相手が明確であることを述べている。

以上のことから、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるために、「聞く」「話す」活動の工夫を行い、同じ言語材料で活動内容が異なる変化を付けた「聞く」活動を十分に行った上で、段階を踏んだ「話す」活動を取り入れていく。本研究での「聞く」「話す」活動の工夫について、表2に示す。

表2 本研究の「聞く」「話す」活動の工夫

変化を付けた「聞く」活動	段階を踏んだ「話す」活動
<ul style="list-style-type: none"> ・同じ言語材料を用いながら、活動内容を変化させる。 ・聞く内容や量を変化させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アルファベットを言う活動からコミュニケーション活動へと活動内容を変化させる。 ・活動の相手や形態を変える。 (全体⇄グループ⇄ペア⇄個人)

(3) 中学生との関わりの場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるためには

ゾルタン・ドルニエイ（2005）は、外国語学習開始時の動機付け戦略として、順調に学習が進んでいる年長の生徒のお手本を見せ、言語に関連する価値観を高めることの必要性を述べている。初めてアルファベットを扱う単元で、中学生との関わりの場を取り入れることは、既に英語を読み書きしている中学生を学習の手本として見せることになり、中学生のように文字を読んだり書いたりしたいと児童の学習意欲を高めることに繋がると考える。

また、金森（2012）も小中連携において児童と生徒の交流の機会は、児童生徒にとっては学ぶ意欲の向上に繋がると述べている。北海道教育大学附属函館小学校第5学年と中学校第1学年による英語の合同授業の実践⁽²⁾では、児童生徒の英語学習への意欲が高まったことや中学生に英語で話すことを促され、知っている英語で何とか表現したり、友だち同

士で協力して英語を発したりせざるを得ない状況が生まれ、英語で伝え合うことができたと言われている。そこで、アルファベットを扱う単元においても、中学生との関わりの場を取り入れることにより、児童の外国語活動への意欲を高め、外国語の音声や表現に触れる機会を増やし、英語での伝え合いを促進することができると思う。

以上のことから、中学生との関わりの場を取り入れることで、中学生とペアやグループで変化を付けたコミュニケーション活動を行うことができ、児童が外国語の音声や基本的な表現に触れる機会が増えて外国語の音声や表現に慣れ親しませることができると考える。また、中学生からメッセージの書き方を教えてもらうことで文字への興味・関心を高めることができると考える。そこで、本研究の構想図を図1のように示す。具体的な工夫については、次頁図2の単元計画に示す。

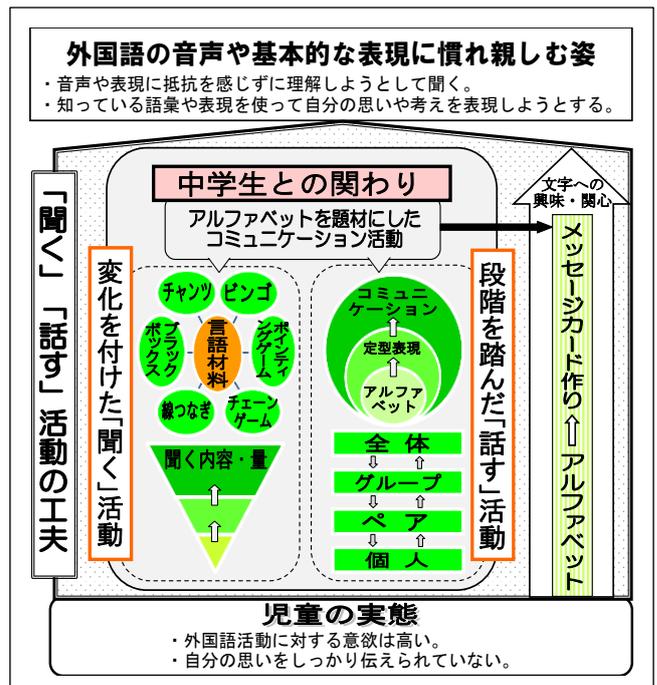


図1 本研究の構想図

III 研究の仮説及び検証の視点

1 研究の仮説

アルファベットを扱う単元において、中学生との関わりの場を取り入れ、「聞く」「話す」活動の工夫を行えば、文字への興味・関心を高めながら外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができるであろう。

時	○目 標 ◆外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんだ児童の姿	主な活動内容	開・中 話・学 生	工夫点
1	○身の回りにたくさんのアルファベットが使われていることに気付くとともに、A～Zのアルファベットの大きな文字とその読み方を知る。 ◆アルファベットの大文字の読み方を聞いたり言ったりしている。	・アルファベット見付け ・アルファベットチャンツ ・ブラックボックスゲーム	○	・アルファベットを題材に変化を付けた「聞く」活動の中で、アルファベットの音声を繰り返し聞かせて慣れ親しませる。
		・単元の見通し 「ALTへのメッセージカード作り」	○	・ALTへメッセージを伝えるという相手意識をもたせる。
2	○アルファベットの大文字とその読み方を一致させる。 ◆アルファベットの名前に含まれる英語の音や日本語と英語の音声面の違いに気付いている。	・アルファベットチャンツ ・ポインティングゲーム ・アルファベットの線つなぎ ・アルファベットビンゴ	○	・日本語の音声と違う英語の音声を意図的に取り上げて意識させながら、アルファベットを題材に変化を付けた「聞く」活動の中で、アルファベットの音声を繰り返し聞かせて慣れ親しませる。
3	○アルファベットの大文字とその読み方を一致させ、ローマ字と英語の違いに気付くとともに、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現を知る。 ◆日本語と英語の音声の違いを認識しながら聞いたり言ったりしている。	・ALTの名前カード集めゲーム ・チェーンゲーム	○	・コミュニケーション活動の中でアルファベットの音声や本単元の表現を繰り返し聞かせ、何度も触れさせて慣れ親しませる。
		・ 中学生が作成したALTへのメッセージカードの紹介	○	・中学生が作成したメッセージカードを紹介することで、カード作りへの興味・関心を高める。
4	○中学生との交流で必要な知りたいことを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ◆知りたいことを尋ねたり答えたりする表現を聞いたり言ったりしている。	・身の回りで見付けたアルファベットで表された言葉の交流	○	・ローマ字読みと英語読みを比較し、違いに気付かせる。
		・身の回りで見付けたアルファベットで表された言葉の交流	○	・身の回りで見付けたアルファベットで表された言葉の中から、中学生に読み方や意味を尋ねたい言葉を選ばせ、中学生と関わるという相手意識をもたせる。
		・チェーンゲーム	○	・本単元の表現を使うコミュニケーション活動として行い、コミュニケーションに必要な表現を使う中で慣れ親しませる。 ・意図的にチェーンゲームで伝えたアルファベットが単語になるようにし、それをローマ字読みと英語読みで比較し、違いに気付かせる。
		・中学生に尋ねる表現をALTから聞く。	○	・中学生に尋ねるための表現に慣れ親しませる。
5	○自分が知っている英語表現を使って、中学生に知りたいことを尋ねたり答えたりしようとする。 ◆中学生の話を理解しようとして聞いたり、自分が知っている表現を使って知りたいことを尋ねたり答えたりしている。	・ 身の回りで見付けたアルファベットで表された言葉の読み方や意味を尋ねる。	○	・中学生とペアやグループで活動させ、アルファベットや本単元の表現に繰り返し触れさせることで慣れ親しませる。
		・ ALTへのメッセージの表し方を尋ね、メッセージカードを作成する。	○	・中学生とペアやグループで活動させ、アルファベットや本単元の表現に繰り返し触れさせることで慣れ親しませながら、アルファベットの文字を書き写させる。
6	○積極的に欲しいアルファベットを尋ねたり答えたりするとともに、思いを伝えたり聞いたりしようとする。 ◆自分が知っている表現を使って思いを伝えたり、抵抗を感じずに理解しようとして聞いたりしている。	・中学生の名刺に書かれた言葉の交流	○	・中学生からもらった名刺に書かれている英単語をローマ字読みと英語読みで比較し、違いに気付かせる。
		・アルファベットカード集めゲーム	○	・中学生に教えてもらった言葉のアルファベットカードを集めるコミュニケーション活動を行う中で、アルファベットや本単元の表現に慣れ親しませる。
		・ALTへのメッセージカード渡し	○	・一人ずつALTにメッセージを伝えさせることで、既習表現と本単元の表現へ慣れ親しませる。

中学生との関わり場

図2 “Hi, friends! 1” Lesson 6 単元計画

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	方法
中学生との関わり場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができたか。	・外国語活動アンケートの事前・事後の分析・考察
中学生との関わり場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して、文字への興味・関心が高まったか。	・行動観察、授業後の振り返りシート の分析・考察

○ 単元名 “Hi, friends! 1” Lesson 6

“What do you want?”

— ALTへのメッセージカードを作ろう —

○ 目 標

- ・積極的に欲しいものや知りたいことを尋ねたり、思いを伝えたり聞いたりしようとする。
- ・アルファベットの大文字とその読み方を一致させ、欲しいものや知りたいことを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。
- ・身の回りにはたくさんのアルファベットが使われていることやローマ字と英語の違いに気付く。

IV 研究授業について

○ 期 間 平成27年11月30日～平成27年12月21日

○ 対 象 所属校第5学年（1学級13人）

V 研究授業の分析と考察

1 中学生との関わりの場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができたか

外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができたかを検証するため、行動観察や授業後の振り返りシート、事前・事後の外国語活動アンケートの分析・考察を行った。

(1) 外国語の音声に慣れ親しむことができたか

本研究では、外国語の音声をアルファベットの音声と捉え、アルファベットの音声に慣れ親しむことができたかについて検証を行った。アルファベットの音声への慣れ親しみに関する事前・事後の外国語活動アンケートの結果を図3に示す。

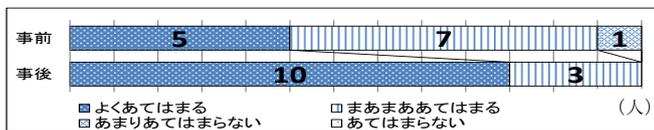


図3 「アルファベットを読むことができる」について (事前・事後アンケート)

図3から、事後では、全員が「よくあてはまる」「まあまああてはまる」(以下、肯定的とする。)と回答し、「よくあてはまる」も5人から10人に増えており、アルファベットの音声に慣れ親しむことができたことが分かる。

図3で変容があった児童らのアルファベットの音声に関わる振り返りシートの記述をまとめたものを表4、表5に示す。

表4 振り返りシートにおけるA児の記述

第2時	・アルファベットはすごく使われているので読んだり書いたりしたい。
第4時	・アルファベットや英語が結構読めたり書けたりした。
第5時	・アルファベットや英語の読み方の持ちょうに気付いた。

表5 「まあまああてはまる」から「あてはまる」へ変容した児童の振り返りシートの主な記述

第2時	・GとZは言い方がちがった。 ・Vの音が思っていた音とちがっていた。
第3時	・アルファベットの読み方が分かってきた。 ・アルファベットの読み方は、ローマ字とはちがうことが分かった。
第4時	・似ているBとV, GとZを聞いて見分けられた。

表4は、事前で「あまりあてはまらない」、事後で「まあまああてはまる」と回答したA児の振り返りの記述をまとめたものである。表4から、A児は、

学習が進むにつれてアルファベットの音声に慣れ親しんでいることが分かる。

表5は、事前で「まあまああてはまる」、事後で「よくあてはまる」と回答した児童らの主な振り返りの記述をまとめたものである。表5から、単元前半でアルファベットの名前を何度も聞かせたことでそれらに含まれている英語の音に気付いたことや、アルファベットを題材にした活動を行う中でアルファベットの音声に慣れ親しんできたことが分かる。

以上のことから、変化を付けた「聞く」活動やアルファベットを題材に段階を踏んだ「話す」活動を行ったことは、アルファベットの名前の中に含まれている英語の音や日本語と英語の音声面の違いに気付くことに繋がり、アルファベットの音声への慣れ親しみに有効であったと考える。

(2) 外国語の基本的な表現へ慣れ親しむことができたか

A 事前・事後の外国語活動アンケートや振り返りシートの分析・考察

外国語の基本的な表現へ慣れ親しむことができたかを検証するため事前・事後の外国語活動アンケートを行い、「聞く」「話す」に関わる結果を図4に示す。また、コミュニケーション活動を多く行った第4時から第6時までの振り返りシートの「聞く」「話す」に関わる結果を図5に示す。

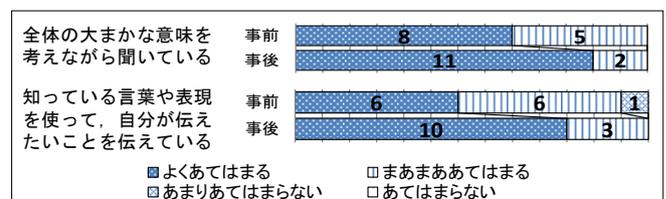


図4 「聞く」「話す」ことに関わる事前・事後の外国語活動アンケートの自己評価

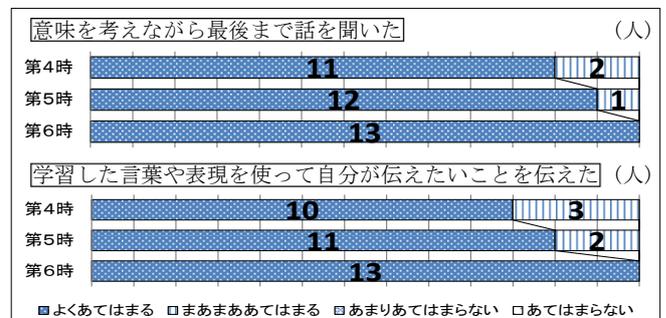


図5 「聞く」「話す」ことに関わる振り返りシートの自己評価

図4から、事後にはどの項目も全員が肯定的回答

をし、「よくあてはまる」と回答した人数も増えている。前頁図5から、学習が進むにつれて「聞く」「話す」ことに関わる「よくあてはまる」の回答が高くなり、第6時では100%となり、外国語の基本的な表現に慣れ親しむことができたと考える。

イ B児の変容から

日頃から発表することに対して消極的なB児は、事前に行った外国語活動アンケートで、「学習した言葉や表現を使って、自分が伝えたいことを友だちや先生に伝えています。」の設問に、「あまりあてはまらない」と回答していたが、事後では、同じ項目に「まあまああてはまる」と回答した。表6は、B児のコミュニケーション活動に関わる授業の振り返りシートの記述をまとめたものである。

表6 振り返りシートにおけるB児の記述

第3時	・「I want～」の意味が分かった。 ・新しい英語（の表現）を覚えたい。
第4時	・「What's this?」など今日習ったことを次の学習で使おうと思った。
第5時	・習った言葉や表現を使うことができた。
第6時	・言うのはむずかしかったけど、英語でALTの先生にメッセージを伝えることができた。

表6から、学習が進むにつれて、コミュニケーションに必要な表現に慣れ、それらを使おうとしていることが分かる。第4時では、チェンゲームの時に聞き取った内容を確認するためALTに「One more time.」と聞き返していた。第5時の中学生との関わりの中では、全体的に緊張しており言葉数は少なかったが、中学生が積極的に話しかけてくれるのをよく聞いていた。また、身の回りから見付けた「WHITE BOARD MARKER」などの読み方や意味を中学生に尋ねることができた。第6時では、第5時で使用した表現を使いながら、次のようなメッセージをALTに伝えることができた。

B児 : My word is "M, A, D, E, I, N, J, A, P, A, N".
Made in Japan.
My message is "Thank you for teaching English.
(And) please enjoy Christmas".
I like BINGO game.
Here you are.
ALT : Thank you.

B児とALTのやりとり

かなり長いメッセージであったが、ALTを見ながら最後まではっきりと伝えていた。中学生との関わりの中でコミュニケーションに必要な表現に慣れ

親しんだことが、次の学習でALTに伝えたいことを伝える活動に繋がり、自信をもって活動に取り組むことができたと考える。

ウ C児の変容から

C児は、外国語活動アンケートの「全体の大まかな意味を考えながら聞いています。」「学習した言葉や表現を使って、自分が伝えたいことを友だちや先生に伝えています。」の設問に事前は「まあまああてはまる」と回答し、事後には「よくあてはまる」と回答した。表7は、C児のコミュニケーション活動に関わる授業の振り返りシートの記述をまとめたものである。

表7 振り返りシートにおけるC児の記述

第3時	・（次から）英語を使って話したい。
第4時	・「What's this?」（の意味）が分かった。
第5時	・中学生は英語が言えていてあんな風に（英語が話せるように）なってみたくと思った。
第6時	・自分で英語が言えた。 ・（表現に）なれてきて言いやすくなった。

表7から、学習が進むにつれて、コミュニケーション活動を行う中で話すことへの意欲が高まり、コミュニケーションに必要な表現に慣れ親しんできたことが分かる。第5時の中学生との関わりの中では、「What's "OPEN" in Japanese?」などと中学生が積極的に英語で話しかけてくれ、それに対して何とか英語や日本語で答える姿が見られた。第6時のALTへメッセージを伝える活動では、最初に手を挙げ、進んで伝えたいことを伝えていた。また、中学生から教えてもらった言葉のアルファベットカードを集める活動では、ペアの児童に渡す自分の赤色のアルファベットカードがなくなり、ALTから自分が必要なアルファベットカードをもらうために次に示すような会話のやり取りが見られた。

C児 : Help me.
ALT : What do you want?
C児 : "A" card, please.
ALT : Here you are.
C児 : Blue. No. 赤の"A" card.
ALT : What do you want?
C児 : Red "A" card, please.

C児とALTのやりとり

C児は、なるべく英語を使おうとしていることが分かる。表7からも中学生が英語を話す姿を目にしたことで学習への意欲が高まり、第6時でも積極的に英語を使おうとする姿に繋がったと考える。

以上のことから、変化を付けた「聞く」活動や段階を踏んだ「話す」活動の工夫は、児童が外国語の基本的な表現に触れる機会を増やし、慣れ親しむために有効であったと考える。そして、ALTへのメッセージカード作りに向けて、中学生と一緒に英語を聞いたり話したりすることは、コミュニケーションに必要な表現に触れる回数を増やし、中学生のように英語を聞いたり話したりしたいという児童の学習への意欲の高まりや外国語の表現への慣れ親しみに繋がることが分かった。

2 中学生との関わりの場を取り入れたアルファベットを扱う単元の工夫を通して、文字への興味・関心が高まったか

文字への興味・関心が高まったかを検証するため、各時間の授業後の振り返りシートや事前・事後の外国語活動アンケートの分析・考察を行った。

(1) 振り返りシートの分析・考察

学習開始時の第1時と中学生との関わりの場を取り入れた第3時、第5時、最終学習時の第6時の文字に関する項目の自己評価の結果を図6に示す。

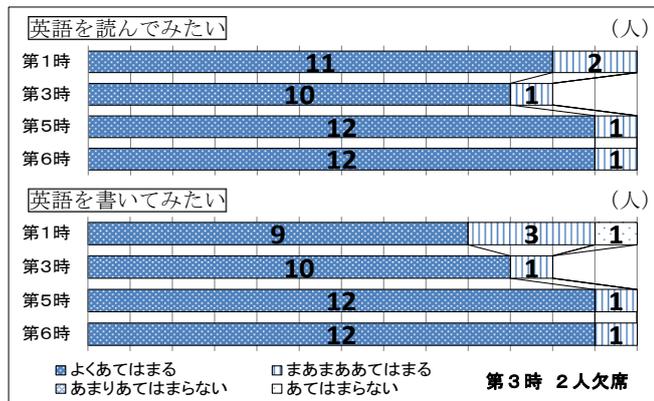


図6 振り返りシートでの文字に対する自己評価

図6から、学習開始時と比べると文字に対する興味・関心が高まっていることが分かる。書くことについては、第3時の学習後に「よくあてはまる」の回答が増えている。「アルファベットを使って単語を書いてみたい。」「言葉をつなげて書いてみたい。」などの振り返りの記述もあり、実際に中学生が書いたメッセージカードを見たことにより、書くことへの興味・関心が高まったことが分かる。第5時の合同授業後には、読むこと書くことのどちらも「よくあてはまる」の回答が多くなった。振り返りにも、「中学生は(英語を)書いたり言ったりできていた。」「中学生のように英語が読めたり書けたりしたい。」

などと記述しており、中学生が英語を読み書きする姿を目にしたことにより、中学生の姿を手本として文字に対する学習意欲が高まったことや読むことや書くことへの意欲に繋がったことが窺える。

第6時に児童がALTに渡したメッセージカードを図7に示す。どの児童も中学生に教えてもらったことを使いながらカードを作成していた。



図7 児童が作成したALTへのメッセージカード

書くことについて第1時で「あてはまらない」と回答したD児は、学習が進むにつれて文字への興味が高まり、第5時と第6時では「よくあてはまる」と回答した。第5時の中学生との関わりの場では、自分が表したい「メリークリスマス」という表現を中学生に尋ねながら、ワークシートに書くことができていた。中学生が、活動の中で小文字についても話をしていたので、振り返りには、「なぜ小文字と大文字があるのか知りたいと思った。」と記述しており、中学生との関わりの中で文字への興味・関心が高まったことが分かる。

(2) 事前・事後の外国語活動アンケートの記述の分析・考察

外国語活動アンケートの事前・事後での文字に対する興味・関心の主な理由を図8に示す。

事前	事後
<ul style="list-style-type: none"> 英語の言葉や文を読んだことがないから。 どんなことが書いてあるか知りたいから。 読めたらおもしろそうだから。 書けると役に立つから。 英語の言葉や文を書いたことがないから。 書けたらおもしろそうだから。 	<ul style="list-style-type: none"> 読めたら楽しいから。 読めないから読めるようになりたいから。 しょう来の役に立つから。 書けると楽しいし、達成感があるから。 他の国の人に手紙が書けるから。 (文字で)書いたら通じるから。

図8 文字への興味・関心の主な理由

図8から、学習前は、新しい学習への興味・関心だと考えられる。学習後には、文字を読むことや書くことの楽しさや利点、手紙などで文字を使って思いを伝えられることなど文字を使ったコミュニケーションの大切さにも気付いたことが分かる。ALT

へのメッセージカード作りに向けて、中学生に教えてもらいながら実際に文字を読んだり書いたりした体験から、文字を用いたコミュニケーションの楽しさや有用性に気づき、文字に対する興味・関心が高まったことが分かる。

以上のことから、ALTへのメッセージカード作りという文字を扱う活動を設定することで文字を読み書きする必然性が生まれ、その必然性をもって児童が中学生に教わりながら英語を読み書きすることや中学生の英語を読み書きする姿に触れることは、児童の学習への意欲に繋がり、文字に対する興味・関心を高めることに有効であったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

アルファベットを扱う単元において、変化を付けた「聞く」活動や段階を踏んだ「話す」活動を仕組み、中学生との関わりの場を取り入れることにより、文字を題材にした様々なコミュニケーション活動の中で音声や表現に触れる機会が増え、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができると分かった。また、ALTへのカード作りという文字を扱う活動を設定することで、文字を読んだり書いたりする必然性も生まれ、中学生との関わりの中で中学生を学習の手本としながら、文字に対する興味・関心を高めることができると分かった。

2 研究の課題

本研究で行った中学生と関わる活動では、結果として「聞く」ことが多くなった。今後は、活動によって、より効果的に児童と生徒が関わる工夫を考え、「聞く」「話す」のバランスを考えた単元づくりに取り組んでいく。また、本研究において、初めてアルファベットを扱う第5学年の単元で、文字に対する興味・関心を高めることができた。今後は、この文字に対する興味・関心を中学校へと繋げていくために、第6学年での文字を扱う単元を含め、系統立てて工夫していく必要がある。

合同授業を行った中学校第2学年の生徒たちは、活動の中で小学生に分かる表現で何とか伝えようとしていたり、正しい単語や表現を教えようと進んで英語辞書を引いて調べたり、中学生同士で確認しながら教えたりする姿が見られ、中学生にとっても学びの場となったことが窺える。しかし、本研究における合同授業は、年間指導計画に位置付いたものでなく

中学生にとっての学びの視点での検証はできていない。今後は、中学校と連携を取り、双方の学びの観点からの単元作りに取り組んでいく必要がある。

【注】

- (1) 大城賢・直山木綿子 (2008) 『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編 Q&Aと授業改善のポイント・展開例』教育出版pp.60-62を参考にし、表として稿者が整理した。
- (2) 伊藤光・宮野健 (平成25年) : 「未来をつなぐ～小学生と中学生の合同英語授業からみえるもの～」『平成25年度小中連携授業実践記録』北海道教育大学pp.13-28を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (平成26年) : 『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
- 2) 兼重昇・直山木綿子 (2008) : 「Chapter 1 小学校学習指導要領『外国語活動』を読み解く」『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書 p.40

【参考文献】

- 文部科学省 (平成20年) : 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版社
- 高橋美由紀 (2007) : 「第3節 小中の子どもたちの交流活動と教師間の連携」『小学校英語と中学校英語を結ぶ一英語教育における小中連携一』高陵社書店
- 西尾由里 (2015) : 「第1部 第4章 音声習得のための文字学習のすすめ」『小学校英語教育 授業づくりのポイント』ジヤース教育新社
- 直山木綿子 (2013) : 『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』東京書籍
- アレン玉井光江 (2014) : 『【連載】英語のつまずきは、アルファベットから!? ～大人が気がつきにくい落とし穴～ 第1回』<http://www.arclj.jp/note/2014/0006.html>
- アレン玉井光江 (2014) : 『【連載】英語のつまずきは、アルファベットから!? ～大人が気がつきにくい落とし穴～ 第3回』<http://www.arclj.jp/note/2014/0008.html>
- 本田勝久・小川一美・前田智美 (2007) : 「ローマ字指導と小学校英語活動における有機的な連携」『大阪教育大学紀要 第V部門 第56巻 第1号』大阪教育大学
- 文部科学省 (平成27年) : 『教育課程企画特別部会 論点整理』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362371_2_1_1.pdf
- 中村典生 (2008) : 「CHAPTER 4-5 小学校での文字指導について」『現場の先生をサポートする 小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社
- 酒井英樹 (2014) : 『小学校の外国語活動 基本の「き」』大修館書店
- 金森強 (2011) : 『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣 ーうまくいかないのには理由(わけ)があるー』成美堂
- ゾルタン・ドルニェイ著、米山朝二・関昭典訳 (2005) : 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店
- 金森強 (2012) : 『小学校外国語活動の進め方ー「ことばの教育」としてー』成美堂